日本篆刻家協会会報

第21号　平成30年10月1日発行
発行：日本篆刻家協会
563-0032 池田市石橋2-2-10-203
TEL 072-760-3852 FAX072-760-3853
E-mail : info@n-tenkoku.jp
http://www.n-tenkoku.jp

第三十四回 日本篆刻展開催

日本篆刻家協会主催「第三十四回日本篆刻展」が平成三〇年四月十八日（水）から二十二日（日）までの五日間にわたって開催された。耐震工事の関係で兵庫県立美術館王子分館（原田の森ギャラリー）二階大展示室での開催は三年ぶりとなった。真新しい壁紙や照明器具により、明るい会場で見応えある展示となった。

第三十四回日本篆刻展は、公募作品五二点（昨年比四点減）、会員作品一七八点（昨年比四点減）、委員作品一五五点（昨年比二〇点減）、常任委員作品一六九点（昨年比五点減）、評議員作品八四点（昨年比六点減）、参与作品四六点（昨年同数）、理事以上役員作品（常任顧問・会長・理事長・副理事長・代表理事・名誉理事・常務理事・参事・理事）七二点（昨年比二点減）の合計七五六点（昨年比五一点減）が展示された。近年出品数の減少が目立っていたが、今年度も昨年同様六・三％の減少となった。

併設の『第二回日本篆刻家協会学生展』は、小学生四〇二点（一年生二三点、二年生五一点、三年生四七点、四年生一二一点、五年生五三点、六年生一〇七点）、中学生九一点（一年生四九点、二年生二九点、三年生一三点）、高校生五八点、合計五五一点の出品があった。昨年比で、小学生一一九点増、中学生一一点増、高校生一四点増、合計一四四点増と、三五・四パーセントの増加となった。特に小中学生に関しては、『小中学生篆刻作品展』として開催した三回の併設展分と合わせ五年間作品展示を行ってきたが、質量共に年々充実しており、定着してきたようである。

本年の戌年に因んで、特別展観は「赤壁賦にちなんで」と題し、北宋の一大文人・蘇軾の赤壁賦に題材をとった書画・刻印・書籍その他器物が数多く展示された。中でも奥村竹亭刻「赤壁賦印顆」は印影と共に印材も総て展示され圧巻であった。

（黒田玉洲）

特別展観・幹部役員の展示コーナー

家族で学生展コーナーを訪れる

奥の特別展観コーナーから会場全景

大勢の参観者で賑わう会場

厳粛に進められる授賞式

第三十四回 日本篆刻展授賞式

挨拶する井谷理事長

四月二十一日、ＡＮＡクラウンプラザホテル神戸において、第三十四回日本篆刻展授賞式が行われた。来賓として兵庫県芸術文化課喜多和美副課長、神戸市文化交流課三宅正人課長、兵庫県芸術文化協会山本亮三理事長、神戸新聞社地域活動局入江智美次長、兵庫県立美術館王子分館田中敬一館長のご臨席のもと厳粛に進められた。

賞状授与に先立ち、本協会井谷五雲理事長の挨拶、並びに松本雅至常務理事から第三十四回展の概要報告、審査員紹介があった。続いて賞状、賞品の授与に移った。高校の部、最優秀賞に輝いた大橋千歳さんが登壇し、授与される姿は凛としてさわやかな印象があり、今後の協会の未来を期待させる感があった。

本年度常任委員の部の最高賞である日本篆刻展大賞は萬谷碧凰氏が受賞され、井谷五雲理事長から賞状・賞品が授与された。

賞状・賞品の授与後は来賓紹介、来賓を代表して、兵庫県芸術文化協会理事長の山本亮三様から祝辞を頂戴した。

最後に、受賞者を代表して、萬谷碧凰氏が謝辞を述べ、授賞式の全てのプログラムは終了した。

（古溝幽畦）

（上）真鍋副理事長から賞状を受ける高校生　（下）受賞者代表の謝辞

知事賞を手渡す兵庫県喜多副課長

市長賞を手渡す神戸市三宅課長

新聞社賞を手渡す神戸新聞社入江次長

祝辞を述べる兵庫県芸術文化協会山本理事長

出品者懇親会

授賞式に引き続き、出品者懇親会が行われた。田中修文常務理事の司会進行のもと、会長挨拶、来賓紹介、来賓を代表して兵庫県立美術館蓑豊館長、中華人民共和国駐大阪総領事館朱昫副領事、神戸新聞社地域活動局入江智美次長兼事業部長が祝辞を述べた。

日本中国友好協会大藪二朗常務理事の乾杯の発声により開宴した。

各テーブルでは出品者、受賞者を囲んで和やかに歓談が始まり、受賞者を祝福する祝杯をあげる光景があちこちで見ることができた。宴が盛り上がったところで古溝幽畦常務理事から祝電披露、上位入賞者紹介がなされた。紹介された受賞者からスピーチがあり、喜びや今後の抱負など力強く語った。

司会の閉会のことばの後、次回第三十五回展に向け、意気込みを新たにそれぞれ家路についた。（古溝幽畦）

全国各地から会員が参集した懇親会

開会挨拶する尾崎会長

日中友好協会大藪二朗常務理事により乾杯

紹介される上位入賞者

第一〇回 日本篆刻家協会役員展

第一〇回日本篆刻家協会役員展が平成三〇年四月二八日(土)から六月二一日(木)まで茨城県古河市の篆刻美術館において約二か月間開催された。展示内容は、常務理事以上軸装三八点、参事・理事軸装三四点、関東地区の参与・評議員額装九点の他、古河篆刻美術館植竹館長の要望で「市川両僊顧問遺墨軸装三点」を加えて計八四点であった。

毎年、展覧会準備には市川先生の下、杏壇篆会の数名が展示作業に加わったが、今回は先生が四月一日逝去されたので古河篆刻美術館館長をはじめ職員に大変迷惑をかけた。

五月三日には古河篆刻美術館へ井谷五雲理事長・真鍋井蛙副理事長の訪問ありとの連絡を受けて、杏壇篆会委員五名が合流し植竹館長へ挨拶の傍ら今後展覧会のより良い方法や、亡き市川先生の後継者を選定すべく懇談し後継者が確定された。

こうして少しずつ変化をしつつ、第一〇回展ともなると観覧者数も一二〇〇人前後に固定した感がないでもないが、この観覧者の中には『書、画、篆刻が組込まれた軸装作品なので価値観に富み素晴らしい』と待ち望んでいる人が少なからずいると聞いている。（阿部祥廬）

全国から参集の会員が熱心に受講

第十一回 中央研究会

平成三十年八月四日(土)～六日(月)の三日間、シーサイドホテル舞子ビラ神戸で開催され、先日来の地震、豪雨災害、台風で参加できなかった方もあったが、全国から一三四人の参加を得た。

一日目

正午から受付開始。午後一時三〇分、喜多芳邑副理事長の司会で開会。尾崎蒼石会長の挨拶に引き続き、井谷五雲理事長から分刻課題の説明がなされた。今回の分刻は、戌(いぬ)年にちなんで、壬戌の年に蘇軾が賦した「前赤壁賦」を割り当てた。賦の朗読のビデオ映像も流され、内容がイメージしやすかった。また、参考として奥村竹亭刻の前赤壁賦の印影も展示された。

講演する大野修作先生

午後二時半から四時の間、四月に開催された第三十四回日本篆刻展の特別陳列で取り上げた「赤壁賦」について、書法漢学研究会主幹の大野修作先生が、「赤壁賦と文人画―大雅・大観・鉄斎を中心に―」と題して講演。「賦」は韻文の一体であるものの、散文と韻文の中間に属する文体で叙事的な内容が多く、「赤壁賦」はより散文的な性格が強いとの説明があった。次に「赤壁賦」の通釈があり、蘇軾ファンが多く、いかに後人から尊敬愛慕されたかを、西村天囚博士の「乙卯壽蘇録」、長尾雨山、市河寛斎、安積艮斎等を例にあげて話があった。それらを聞いて、「赤壁賦」が文人画を支えた大きな題材になったことを理解することができた。過日の池大雅展、横山大観展で展示された赤壁図、富岡鉄斎の赤壁図を見せていただき、日本でも愛し好まれた画題であることを実感した。このように、今日まで語り継がれている蘇軾の「赤壁賦」がいかに素晴らしいかを教えていただき、それを分刻できる機会を得たことを幸せに思った。

「赤壁賦」関連資料の展観

講義終了後、各自部屋に移動し、舞子の間も使って課題制作に取りかかった。

六時半からの夕食懇親会は、大野修作先生にも加わっていただき、黒田玉洲代表理事の司会のもと、なごやかで、歌も交え楽しいひと時となった。

夜は、八時から別室にて、印社代表者会議、企画委員会が開催された。

印社代表者会議

二日目

午前九時から十二時まで「印と印稿について」の講演があった。喜多芳邑副理事長は、鄧散木の

講義する喜多副理事長

「篆刻学」の章法を中心に、印稿作成の一助となる十四節を選び、印例を挙げて詳しく章法の説明をした。何となく頭にあったものを系統だてて理解することができた。次に、井谷五雲理事長の「印と印稿―章法を考える―『篆刻思源』『篆刻指南』に学ぶ」と題し、大正二年に発行された圓山大迂著「篆刻思源」、昭和三十八年発行の石井雙石著「篆刻指南」という篆刻のテキストの章法について書かれた部分の解説があった。続けて、印例を挙げて、辺縁と文字の関係を中心に解説をした。今回の両先生の講義を通して、古印を勉強することの大切さ、上下左右の文字が相互に関連しあってこそ、生気のある作品が生まれるということを実感した。今後の作品制作にぜひ役立てたいと思った。

講義する井谷理事長

次に真鍋井蛙副理事長から「公募展に出品する際の注意点」の話があった。まず、出品に際しては、日頃から、内的モチベーション（個展や社中展、書や篆刻に関する文物を集める等）と外的モチベーション（他人と競争する等）の両輪を高めておく必要があるということ、また、読売展の審査をされて気づかれたことを具体的に話した。

○額について

＊厚さは四㎝以内。

＊アクリルがないものは規定違反。

＊落しの額にするときは、サイドぎりぎりに落款を入れない。

○印のまとめ方について

＊釈文、落款の文字が大き過ぎる。

＊印影の下に側款拓をつける場合、自用印を押すのは良いが、小さ目の印を押すこと。

○押印について

＊印泥がにじんでいるものが見られる。公募展に出す時用にひとつ調子の良い印泥を用意しておくこと。

＊夏べたついている印泥には、もぐさを足したり、冬かたくなったときは、こたつで温める。

＊紙の裏についた印泥の汚れも、表具で浮き出るので気を付けること。

＊印泥のつけ過ぎ（文字の太さが変わる、線がにぶる）、不足に注意する。

＊落款印が大きすぎるものが多い。二字以上の落款印を使うこと。一字印は好ましくない。

○その他

＊和習（弥生、如月等）の月名等は避けたほうが良い。

＊印文と釈文の文字は同じにする。（旧字体で揃える）

＊字典を引いた時、隣の文字と間違えないように。

＊特に「朝陽字鑑精萃」を使う時は小篆からかけ離れた印篆を使わない。

講義する真鍋副理事長

以上のような指摘があった。

午後一時半から五時まで、三時間半にわたり、企画委員十二名（会長、常任顧問、理事長、副理事長、代表理事）による分刻課題および持参印稿の添削指導。十分な時間を使って懇切丁寧な指導がなされ、参加者にとっては、日頃指導を受けることができない先生方に教えを受け、学ぶべきところが多く有意義な時間を持つことができた。それと並行して四時から五時、オークションの内覧会が行われた。

夕食会は、午後六時から、田中修文常務理事の司会で進められ、古溝幽畦常務理事からは、各公募展成績発表があった。夕食後、午後八時半から昨年同様、東尾高岳理事の司会でオークションが行われ、一〇〇点近くの出品があり楽しいひと時を過ごすことができた。

企画委員による添削指導

三日目

チェックアウト後、午前九時半、舞子の間に集合し分刻課題を提出し、尾崎蒼石会長から講評。恒例により、各種展覧会案内、理事長挨拶にて研究会の幕を閉じた。第十二回中央研究会も多くの参加者を期待したい。（出田塘葭）

訪中団報告

中日友好四十周年記念「丁輔之『海派甲骨文書法』芸術伝承巡展」「第二回陳介祺芸術節」開幕式参加のため八月三十日～九月三日の予定で訪中団を派遣した。

行程の概要
一日目：早朝関空に集合し、上海浦東空港へ。専用車にて杭州へ向かう。
二日目：中国印學博物館での行事に参加。
三日目：早朝ホテル出発、飛行機にて青島へ、車で天柱山・鄭羲上碑へ向かう。
　　夕刻維坊のホテル麗景酒店到着、久々に爆竹の歓迎を受けた。
四日目：第二回陳介祺芸術節に参加。
五日目：早朝ホテル出発、向かうは雲峰山、鄭羲下碑・論経書詩・右闕・左闕、
　　九仙等々。
台風二十一号の影響を受け、青島に足止めされ、アクシデントに遭遇しながら二日遅れての帰国となった。

丁輔之〝海派甲骨文書法〟芸術伝承巡展

八月三十一日、西泠印社内の印学博物館で『海派甲骨文書法』芸術伝承巡展の開幕式が執り行われた。中国からは西泠印社秘書長の陳振濂先生、日本からは尾崎蒼石会長が祝辞を述べた。この展覧会では丁輔之の生誕一四〇年、逝世七〇年を記念して、彼の作品並びに現代作家による甲骨文の作品が展示された。本協会からは尾崎会長、井谷理事長、中島副理事長、真鍋副理事長、小代表理事が出品した。西泠印社内の還樸精廬にて開催された討論会では井谷五雲理事長が「甲骨文書法の日本事情」（次ページに全文掲載）と題して講演した。（稲垣華扇）

看板の前で記念撮影する訪中団

講演する井谷理事長

第二回陳介祺芸術節

九月二日午前九時から、第二回陳介祺芸術節の開幕式が、十笏園文化街区中心広場において開催された。小学生の篆刻実演の後、駱芃芃芸術院院長から中国書法家協会蘇士澍氏の祝電披露があった。陳介祺研究会会長陳新氏から今回の芸術節の概要説明があり、崔志強、黄嘗銘両氏から新書紹介がなされ、孟鴻声氏から陳介祺研究委員会の構成委員の紹介があった。日本篆刻家協会に対しては、昨年出品応募・寄贈された作品への感謝状、尾崎会長の作品展から印二〇方・書作二〇点の寄贈に対しての感謝状が手渡された。最後に王丹氏による閉会宣言で開幕式を閉じた。

地元小学生による篆刻デモンストレーション

開会式に中国各地から参集

芸術節開会式

展覧は六棟で分類され、第一棟は本協会役員作品も含めた「金石之都」「金石聖地」の印章の展示である。第二棟は尾崎蒼石作品展と続き、あと台湾篆刻協会作品展、金石拓本展等、多様な展示がなされていた。参観後は広場内の印材等の露天商で楽しんだ。

午後は会場近くの潍坊三中を訪問し、進んだ篆刻教育の実態を目の当たりにした。二時半から、海内外金石篆刻名家発言として、崔志強、徐正濂、朱培尓、賴非、陸明君、范正紅、黄嘗銘、尾崎蒼石の八名による講義がなされた。

陳介祺研究会会長陳新先生は、一般宴席とは別に、日本篆刻家協会の我々一行のために宴席を設けてくださり、手厚いもてなしを受けたことに感謝する次第である。（喜多芳邑）

「金石之都」作品の展示

蒼文篆会訪中記

第二回陳介祺国際芸術節開幕式に合わせて、蒼文篆会関係者六名は九月二日に中国潍坊市に到着し、尾崎蒼石会長と合流。翌日十笏園広場での開会式に参列、各会場の展示見学へ。中でも二号館で「尾崎蒼石書法篆刻展」が開催され、尾崎先生の挨拶文と中国篆刻芸術院の駱梵梵院長のメッセージが大きく入り口に掲げられ、尾崎先生の作品が高く評価されていたのが印象的であった。展示は作品印材二〇顆、印塼や書軸・墨絵など六〇点と充実した内容であった。二日の夜は万印楼印社・潍坊市書法家協会・陳介祺研究会の方々が尾崎先生の個展を祝う食事会を催され、井谷五雲先生をはじめ篆刻家協会役員の皆さんと蒼文篆会関係者も招待されて有意義な交流会となった。翌三日からは蒼文篆会独自の行程で北京に移動、古い町並みの散策や中国国家博物館見学・瑠璃廠での文物の購入など。四日夜には北京語言大学朱天曙先生や画家の曽印泉先生らと会食。朱先生から、同大学客員教授である尾崎先生の講義を企画したい、という提案がなされ大いに盛り上がる。台風二十一号の影響で帰国予定が一日延びて六日に帰国したが、日程変更で浮いた半日に慕田峪の万里の長城を見学し、書法篆刻の世界と共に中国悠久の歴史を体験した意義深い旅となった。（岸村爽風）

講演する尾崎会長

尾崎蒼石展の展示

会場入り口に掲げられた大きなのぼり幕

甲骨文書法の日本事情

井谷五雲

甲骨文字は一八八九年、当時の国子監祭酒であった王懿栄とその食客的立場であった劉鶚（鉄雲）によって見いだされ、それが漢字の最も古い遺品であることに気づきました。そして五〇〇〇片を収集し、その中の一五〇〇片を以て『鉄雲蔵亀』六冊を刊行したのは一九〇三年のことであります。そのことは周知のところで、当時その発見が世界中を驚かせたのも我々は先人から伝えられ、よく聞き知っているところであります。

その後、羅振玉が『殷墟書契前編』『殷墟書契菁華』『殷墟書契後編』等で合わせて三四〇〇余片を世に示しました。王国維は『戩壽堂所蔵殷墟文字』で六五五片を示し、初めて釈文が付されました。以後、孫詒讓・董作賓・郭沫若等研究者が陸続と登場し、今日に至るまでの甲骨學の研究発展は目覚ましく、枚挙にいとまありません。

『鉄雲蔵亀』の刊行によって、初めて甲骨文の存在が世に知らされた二九〇三年はちょうど西泠印社が設立されたときであります。不思議な縁を感じます。

そして上海において、一九二八年に丁仁（鶴廬）が『商卜文集聯』を刊行しました。これは従来の歴史資料的文字学的書籍と異なり、初めて書法的見地から制作された出版物です。

そこが大変重要だと思われます。甲骨文が世に現れてわずか二十五年の後に書法的見地から出版されているのです。丁仁の慧眼と言えるでしょう。一昨年秋に、浙江美術館で開催された〝西泠四君子〟展の展観で見られたように丁仁は甲骨文字による書作品を大変多く制作しております。その活動は清代中期以後の金石学の勃興による膨大な篆・隷書作品制作時代の掉尾を飾る一大エポックと言えるでしょう。書体を商・周の金文或は秦漢の篆隷に拠った書法作品に新たに甲骨文字を加えるきっかけとなったことは間違いのないところでしょう。

日本における甲骨學は一九一七年に林泰輔が『亀甲獣骨文字』一〇三二片を刊行し、その研究成果が高く評価されたのが最初であります。折良く羅振玉が来日しており、相互に刺激し合っての研究発展であったことは日本においては有名なことであります。以後、京都大学と東京大学に優秀な人材が揃い甲骨學における研究が行われてきました。今日においては、それが河南省安陽の出土で商代の卜辞であることは知らぬ者は居りません。

甲骨文字が書法上において、今日大きく取り上げられるのには当然の理由があるはずです。その理由の最も大きなものはその造形美であると言えるでしょう。漢字の造形は複雑ではあるが合理的であり、具体性と抽象性の相互構築など、実に優れた造形美を持っています。それゆえに世界に類を見ない〝書法〟という文字芸術を生み出したのであります。そもそも漢字、その初形である甲骨文字は天上の祖先神と地上の王との対話の道具として誕生したのです。〝神と人との対話の道具〟ということです。その造形美に人々が魅了されないはずはありません。かくして甲骨文字は三〇〇〇年の眠りから覚めて、今日の我々の書法篆刻芸術に大きく貢献する存在となったのです。

日本においては中国で言うところの書法を〝書道〟と呼びます。合理的な法則性重視の〝法〟という文字を使用せず、より精神性重視の〝道〟と言う文字を使用します。それは日本における〝華道〟〝茶道〟あるいはスポーツの〝柔道〟〝剣道〟と言うのと同じ意味合いを持ちます。従って日本の書道と言う言葉は造形美とともに精神性の高さを重要視します。そして、より精神性を表現しやすく、情感を伝えやすい書体として行書や草書が多く書作品に用いられてきました。それは日本の中世以来の伝統で、同時に日本人の美意識に合致するものです。日本の室町期に舶載された中国の書法篆刻芸術は明時代のそれであり、日本において篆書・隷書が古典資料に基づいて本格的に書され、或は本格的な篆刻作品が制作されるのはやはり中国の清朝中後期に勃興した金石書法芸術文化の輸入を待たなければなりません。明治時代に入るのを待たなければなりません。今から一五〇年ほど遡るわけです。十八世紀以降、中国においては多くの優れた芸術家や学者が篆書・隷書に新しい息吹を吹きかけて書芸術を展開してきましたが、その影響が日本にもたらされるのを待たなければなりませんでした。そもそも日本の行草を主体とする書道芸術に篆書・隷書が本格的にもたらされ、書作されるということは日本の書道文化において大変大きな変革であると言えます。日本書道史上の大きな分岐点であると言えます。

日下部鳴鶴・巌谷一六・松田雪柯・中林梧竹・中村蘭台・西川春洞・副島蒼海等々まことに多くの優れた人材がその時期に登場しました。

明治以来の金石学的書法芸術の隆盛に導かれて、二〇世紀中盤の科学的思考及び西欧的絵画理論及び芸術論の受容、及び近代的知性というようなものが相まって、さらに日本書道に大きな変革期が訪れます。日本においても甲骨文字が書作上に登場する時代を迎えます。しかし、その芸術的様相は中国とは少し違うように思えます。中国書法においては甲骨文字はあくまでも文字であり、その伝達性を基本に文字の造詣的魅力を表現することが主眼の書表現であるように、私には思えます。日本においては更に加えて甲骨文字を書するその線質に、いかに情感を加味し、魅力的な書作品にするのかを志向する書芸術であるように思えます。やはり知的造形に日本人的情感を加味したいという欲求が働くように見えます。そしてその動きはちょうど抽象芸術である前衛書道の隆盛と歩を一にして、今日良く使用される〝書〟と言う言葉が人口に膾炙するようになりました。この五〇年、日本においては近代人の知的表現に加えて、日本的情感の発露としての書道が〝書〟と言う言葉とともに発展し、そこに甲骨文字が参入してきたという事情があると説明できるでしょう。

これは時代の必然と言えるでしょう。

二〇一八年八月三一日　於、西泠印社

二月課題「忘筌蹄」

役員（井谷五雲選）

桂舟

胡蝶

董圃

穆風

仁美

常任委員（井谷五雲選）

井泉

葭舟

墨石

忠義

秀鳳

委員（出田塘葭選）

龍生

博子

五岳

貴美子

黎秀

会員（真鍋井蛙選）

哲華

杏芽

駿

管玉

翠庵

一般（松本雅至選）

晶石

恵子

真紀

俊彦

豊

【役　員】遠藤紫子人　○岡田桂舟　立石見聲　○近藤胡蝶　山内昂波　○今村董圃　松野碧泉　○畠穆風　木村容庸　○片岡仁美　山村千秋　丸山沙舟　土井青雅　上田静雲　浅野道男　計五三人

【常任委員】中本管城　○山崎井泉　川栄玉峯　○平中葭舟　黒田悦子　○長谷山墨石　月森康生　○高橋忠義　奥島極浦　○津田秀鳳　岡崎戯石　萬谷碧凰　大城容史子　音川景香　永井恵子　計五一人

【委　員】大野勝山　○吉岡龍生　木谷劉石　○山杉博子　山崎游石　○小松五岳　山下登雲　○西岡貴美子　井畑喜雨　○武田黎秀　岡本浩二　堤黄瑞　山本智子　伊神千博　荒井典恵　計四四人

【会　員】鈴木素風　○吉田哲華　鈴木千春　○植田杏芽　明石精　○河野駿　芦野幸宏　○中本管玉　栗永美舟　○尾畑翠庵　寺地寿和子　遠藤幽篁　伊藤光崖　成瀬登志美　平子正江　計四六人

【一　般】石場渓州　○誤晶石　楊八哥　○山崎恵子　三宅洋子　○松屋真紀　須田浩次　○小倉俊彦　國本学　○吉田豊　小野倫熙　浅井千賀子　福庭義明　大平正子　小林靖武　計二〇人

三月課題「陶然自楽」

役員（多田龍淵選）

燕安

明峯

静雲

董圃

仁美

常任委員（梶川久美子選）

博石

容史子

忠義

恵子

平峰

委員（梶田稲州選）

萩露

不條

勝山

貴美子

雪峰

会員（北室南苑選）

輝雄

良孝

進

哲幸

登志美

一般（草田翠苑選）

恵子

八哥

鈴輪

俊彦

洋子

【役　員】松野碧泉　○古野燕安　岡田桂舟　○石亀明峯　名倉克彦　○上田静雲　永野草翠　○今村董圃　細川恵苑　○片畑仁美　増田繁治　西口青咲　古瀬章石　南敏子　正和杏葉　計五九人

【常任委員】吉崎雲堂　○小澤博石　番定静山　○大城容史子　東緑園　○高橋忠義　池谷宝樹　○永井恵子　福谷華紅　○松永平峰　月森康生　森井昌雲　奥島極浦　鈴木桂峰　計五一人

【委　員】小林邦夫　○大塚萩露　小松五岳　○川端不條　伊神千博　○大野勝山　藤田勉　○西岡貴美子　鈴木真壽男　○白幡雪峰　小澤一哉　中島幸園　舟山竹峰　澁谷春壽　堤黄瑞　計四八人

【会　員】橋本陽一　○向仲輝雄　服部和彦　○相川良孝　木田好昭　○田邊進　河野无喬　○吉田哲幸　鈴木素風　○成瀬登志美　遠藤幽篁　松浦雅宣　尾畑翠庵　池田叡花　高橋子路　計四三人

【一　般】誤晶石　○山崎恵子　石場渓州　○楊八哥　浅井千賀子　○牛島鈴輪　大喜多惠子　○小倉俊彦　石田幹石　○三宅洋子　三徳　川尻蒼山　松屋真紀　吉田豊　福庭義明　計二〇人

四月課題「如意」

役員（平田蘭石選）

燕安

育治

常任委員（熊本夕生選）

華紅

葭舟

委員（黄平齋選）

一哉

五岳

会員（榊原晴夫選）

哲幸

輝雄

一般（田中修文選）

晶石

碧翠

道男

喜久

勝山

恵理子

千賀子

游光

清嗣

英昭

杏芽

鈴輪

素翠

謙之

不條

青榴

丹櫻

【役員】増田繁治　○古野燕安　葭岡慶石　○磯村育治　山村千秋　○浅野道男　今村董圃　○水巻游光　田中九成　○宮越素翠　西口青咲　宇於崎碧峯　片岡仁美　水野和香　丸山沙舟　計五六人

【常任委員】山崎井泉　○福谷華紅　乃村翠琴　○平中葭舟　川栄玉峯　○脇田喜久　中本管城　○平松清嗣　吉崎雲堂　○北畑謙之　池谷宝樹　小澤博石　奥島艸丘　佐藤翠龍　吉田鏡水　計五七人

【委員】八木正明　○小澤一哉　水中澄山　○小松五岳　浦田紫雯　○大野勝山　白幡雪峰　○小林英昭　澁谷春壽　○川端不條　堤黄瑞　北岡秋艸　高木啓志　大崎渓白　内田哲舟　計四九人

【会員】平子正江　○吉田哲幸　山中徹人　○向仲輝雄　中本管玉　○袴田恵理子　池内龍泉　○植田杏芽　服部和彦　○松島青榴　上田玉雲　尾畑翠庵　成瀬登志美　河野无喬　伊藤光崖　計四九人

【一般】須田浩次　○誤晶石　小倉俊彦　○國江碧翠　楊八哥　○浅井千賀子　吉田豊　○牛島鈴輪　大平正子　○小西丹櫻　板屋玉芝　山崎恵子　石場渓州　松屋真紀　広森勝竹　計二三人

五月課題「可久長」

役員（真鍋井蛙選）

浩佳

青露

常任委員（堤白遊選）

碧凰

墨石

委員（中村葉舟選）

勝山

貴美子

会員（長谷川帰海選）

叡花

輝雄

一般（長谷川拓石選）

俊彦

真紀

章石

謙之

黎秀

幽篁

晶石

沙舟

平峰

乾石

信代

碧翠

燕安

翠輝

秋鹿

登志美

幹石

【役員】上田静雲　○花房浩佳　浅野道男　○畑間青露　田原呉山　○古瀬章石　川崎臼水　○丸山沙舟　松野碧泉　○古野燕安　片畑仁美　南敏子　水野和香　木村容庸　谷桜洲　計六〇人

【常任委員】津田秀鳳　○萬谷碧凰　奥島極浦　○長谷山墨石　永井渓舟　○北畑謙之　杉山美華　○松永平峰　藤聿彩　○今宮黎輝　安西幸恵　鈴木城山　堂守唯文　月森康生　田中紅珠　計五八人

【委員】伊神千博　○大野勝山　高木啓志　○西岡糞子　境山正甫　○武田黎秀　白幡雪峰　○永田乾石　北岡秋艸　○井上秋鹿　小松五岳　伊谷昌子　小林邦夫　大塚萩露　内匠畊甫　計五〇人

【会員】袴田恵理子　○池田叡花　松村信夫　○向仲輝雄　中本管玉　○遠藤幽篁　田邊進　○高島信代　内田美代子　○成瀬登志美　壹岐照美　植田杏芽　尾畑翠庵　佐川渓石　相川良孝　計四七人

【一般】新田純子　○小倉俊彦　浅井千賀子　○松屋真紀　石場渓州　○誤晶石　板屋玉芝　○國江碧翠　秋吉隆夫　○石田幹石　楊八哥　山崎恵子　須田桃苑　牛島鈴輪　大喜多惠子　計二四人

六月課題「心無累」

役員（伊藤雅夫選）

明峯

仁美

浩佳

克彦

碧泉

常任委員（古溝幽畦選）

容史子

榮子

葭舟

華紅

宝樹

委員（松本雅至選）

悦治

哲舟

五岳

群蛙

正人

会員（御手洗眉山選）

管玉

幽篁

哲幸

无喬

素風

一般（池田泥異選）

鈴輪

恵子

俊彦

八哥

正子

【役員】山村千秋　○石亀明峯　上田静雲　○片畑仁美　高野弘深　○花房浩佳　田中九成　○名倉克彦　葭岡慶石　○松野碧泉　坂正歩　今村董圃　山崎一雄　丸山沙舟　正和杏葉　計五四人

【常任委員】長谷山墨石　○大城容史子　奥島極浦　○中井榮子　萬谷碧風　○平中葭舟　大原誠　○福谷華紅　東緑緑　○池谷宝樹　岩田耕烟　月森康生　小澤博石　榊原有光　北畑謙之　計五三人

【委員】井上秋鹿　○兼子悦治　大塚萩露　○内田哲舟　鈴木眞壽男　○小松五岳　大野勝山　○田原群蛙　大崎渓白　○青山正人　高木啓志　北岡弘子　西岡貴美子　八木正明　中本崇　計四五人

【会員】山中徹人　○中本管玉　木田好昭　○遠藤幽篁　池内龍泉　○吉田哲幸　佐川渓石　○河野无喬　内田美代子　○鈴木素風　川崎禎水　高橋子路　相川良孝　袴田恵理子　矢場鷺雪　計四六人

【一般】広森勝竹　○牛島鈴輪　浅井千賀子　○山崎恵子　小野倫熙　○小倉俊彦　國本学　○楊八哥　大喜多惠子　○大平正子　松屋真紀　吉田豊　板屋玉芝　國江碧翠　後藤知洲　計二七人

七月課題「物新人舊」

役員（黒田玉洲選）

正歩

明

尚石

芳泉

董圃

常任委員（伊佐治祥雲選）

紅珠

克衛

喜久

恵草

極浦

委員（石原豊玉選）

雪峰

乾石

悦治

勝山

五岳

会員（出田塘葭選）

幽篁

叡花

龍泉

登志美

良孝

一般（大村雪陵選）

佳苑

咲美

玉芝

正子

恵子

【役員】木村容庸　○坂正歩　片畑仁美　○川久保明　浅野道男　○渡邊尚石　南敏子　○安井芳泉　古野燕安　○今村董圃　遠藤米子人　名倉克彦　立石見聲　田原呉山　丸山沙舟　計五二人

【常任委員】平中葭舟　○田中紅珠　大城容史子　○西野克衛　鈴木桂峰　○脇田喜久　松永六朗　○鈴木惠草　池谷宝樹　○奥島極浦　平松清嗣　杉山美華　奥島艸丘　番定静山　津田秀鳳　計四七人

【委員】井畑喜雨　○白幡雪峰　中村紀久　○永田乾石　藤田勉　○兼子悦治　堤黄瑞　○大野勝山　森口淡石　○小松五岳　山本智子　大塚萩露　西岡貴美子　高木啓志　大崎渓白　計四七人

【会員】服部和彦　○遠藤幽篁　小川玉籟　○池田叡花　植田杏芽　○池内龍泉　根本哲男　○成瀬登志美　中本管玉　○相川良孝　尾畑翠庵　寺地寿和子　吉田哲幸　木田好昭　田邊進　計四七人

【一般】吉田豊　○筑摩佳苑　広森勝竹　○真咲美　三宅洋子　○板屋玉芝　國江碧翠　○大平正子　新田純子　○大喜多惠子　片岡瑞峰　石場渓州　小林靖武　山崎恵子　小林媛瑤　計二九人

第３５回 読売書法展

準大賞作品

「飲冰亜蘭」

井谷五雲

展覧会成績

第七十二回 日本書芸院展

史邑賞
田中修文

大賞
北田成磊　寺田濤雲　西口青咲
松本清苑　山本寿法

特別賞
新井散葉　片畑仁美　大城容史子
神吉二平　嵯峨洛山　東緑園
平田琴風　松田仰風

準特別賞
池谷宝樹　香取桃水　高橋忠義
武田黎秀　戸出九廬　中森紫香
南蒼苑　山本杏華

第六十四回全関西美術展

日本書芸院大賞
松本艸風

全関西美術展賞第三席
武田黎秀

全関西美術展賞佳作
藤本蘇西

日本書芸院賞
三好和生　西長玄遊　白澤虹石
花房浩佳　萬谷碧凰　植田杏芽

第三十五回読売書法展

準大賞
井谷五雲

新聞社賞
田中修文

俊英賞
出田塘葭

奨励賞
射場少藍　吉田雅風

特選
岸村爽風　寺田濤雲　山崎芳園

逸秀
平田征男　松田泰軒　井本雅士
水野和香　武田黎秀　古瀬章石
植田杏芽　高野弘深　石崎魯行
大江清風　中野聡　寺地寿和子
石川無外　松本清苑　山崎井泉

青鐙忘詠（十七）

小朴園

「眉寿」

先日、理髪店で散髪してもらっていて、何回か前から眉毛を少しだが刈られていることに気付いた。

若者のように眉毛を短くして形よくする、あれでは無論なく、老人特有の長く伸びたのを刈って揃えるそれである。長い眉と言えば村山富市元首相を思い起こすが、それほどではなくても、そろそろ私もそんなことがふと気になり、眉寿と呼ばれる年令に近づいた模様である。

今、気付いたことがある。散髪とは髪を散らすと読めるが…髪を整えるなら理髪の方がよいか、いや言葉は難しい。

眉寿、長年と同じく長生きすることをいう。長寿の人は眉毛が長くのびることからこの呼称が生まれた。

長寿を表わす言葉は他に、大寿、無量寿、長生、寿昌、寿萬年、頤寿、恭寿、鶴寿、長年等々があり、年令を言う言葉に古稀、喜寿、米寿、卒寿、白寿等があるが、先師はよく卒寿はいけない、寿を卒するとは死ということになる、と、然りである。九十歳をうまく言い表わす言葉はないものか。

眉寿
黄士陵印

眉寿無疆
呉樸堂刻

眉寿
趙時棡刻

周易眉寿
呉昌碩刻

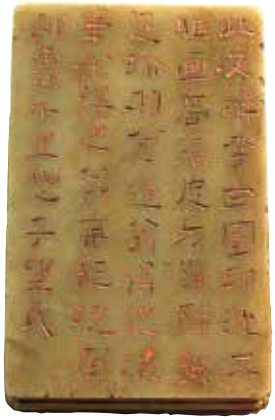
連載

名印解説　高芙蓉〈二〉「五株烟霞図倪迂」

真鍋井蛙

①

③



②

この印は『芙蓉軒私印譜』（一八八三年刊）に所載され古来より高芙蓉刻の代表作である。

先日某所にて拝見し、心躍り原石を持つ手が震えたのを覚えている。収蔵者にご無理をお願いしこの歴史的印を皆様にご紹介したいと思う。

高芙蓉については書・画・篆刻、ほとんどのものが偽物であると聞かされている私にとっては確かな基準となるものである。材はこの当時の一般的青田石である。計測するのを忘れてしまい残念だが①の写真から見ても高さは三センチ位であろうか。②の如く頭款であり五行にわたる長文が刻されている。

さて、興味深いのは③の印面の刻し方である。かなり浅い刻で文字や画以外の場所（押印した時に白く残る部分）の刻し方に特徴がある。現在の我々とはかなり異なり、いわば版画家の如く平に残しているのが見てとれる。（現在初学の人に何も言わずに刻してもらうとこのようになる）池永一峰（一六六五―一七三七）の印も拝見したがこれとほとんど同じ刻し方であった。この時代の刀法を覚えておきたい。

その門流は関西を中心に全国におよび葛子琴、趙陶斎、浜村蔵六、曾之唯、源惟良等々を輩出しているので私としても関西在住の印人として、今回のことを機に高芙蓉一派の研究を深めてみたいと思う。

月例作品募集（2019年）

	課題	出典	意味
1月	無疆	書経	限りが無いこと。
2月	如是観	金剛経	ものごとはこのような見方である、ということ。
3月	心善淵	老子	心は深い淵のように静かである。
4月	恬筆倫紙	千字文	秦の蒙恬が筆をつくり、後漢の蔡倫が紙をつくった。
5月	無罣礙	般若心経	邪魔が無く、悟ること。
6月	真率	晋書	正直で飾り気のないこと。
7月	息心静気	趙之謙印跋1	心を安らかにし、気持ちを静かにすれば、
8月	乃得渾厚	趙之謙印跋2	渾厚な趣を得ることができる。
9月	書肇於自然	九勢八訣	書は自然より始まったのである。
10月	守拙	陶淵明	生来の素朴な拙い態度を守って、上手く立ち回ろうとしない。
11月	澹然	荘子	あっさりとして安らかなさま。
12月	福如雲	旧唐書	雲のように幸福が多い。

応募要項

①会員CDを必ずご記入ください。未記入の場合は審査対象外となります。

②印の大きさは一寸以内、用紙は協会指定印箋（篆社印箋も可）

③応募は各月1人1点、締め切りは各月末日（消印有効）

送付先

〒563-0032大阪府池田市石橋2丁目2-10牧野ビル203　日本篆刻家協会　「○月課題」係

お問い合わせ　協会事務所　TEL072-760-3852

月例課題一般の部
応募の皆様へご連絡

平素は篆刻を楽しみ、本協会の一般への応募をいただきあとがとう存じます。

さて、2019年1月から一般の部を本協会の諸事情により廃止することとなりました。会員・役員の部につきましては今まで通り応募を受付いたしますので、よろしければ日本篆刻展にご出品いただき会員となって、月例課題に応募していただければと存じます。

（日本篆刻家協会総務局）

各印社活動トピックス

第八回 寧和展

三月二十九日～四月一日までの四日間、奈良文化会館において開催した。

ワークショップとして一般の来場者に会員の指導で姓名印を作成していただいた。特別展観として、梅先生、趙之謙以降の近現代中国作家の印譜・印屏を十数点展示した。来場者五〇〇名弱、ワークショップ参加者は二〇名ほどであった。尾崎会長をはじめ多くの協会の先生方にご来場いただき厚くお礼申し上げます。

第三十三回 隨風會書法篆刻展

四月三日から八日までの五日間、京都市美術館別館にて開催しました。今回の国際交流は中国江蘇省の南京印社、特別招待は韓国水原書芸総聯合会、初日には韓国から十二名が訪日しました。東京中央オークションとの併催は「高邁・明清書画名家収蔵展」、王鐸の草書、行書、張瑞図の長条幅は圧巻でした。西郷隆盛、伊藤博文、中村不折等幕末・明治・大正・昭和の書作品、和硯、翡翠・ラピスラズリなどの非硯石硯等尊彝閣蔵品を特別陳列しました。出品者六七名は篆書と篆刻を一体化した全紙、半切軸作品、読書の詩「憶書」を分刻しました。出品者刻の引首印を販売し一二五顆は完売。売上金二二七二〇〇円は震災孤児支援金として、福島県保健福祉部こども未来局に送金しました。

（中村葉舟）

第三回 有磯篆会篆刻作品展

第三回展を八月十七日（金）から十九日（日）までの三日間、富山県民会館二階Aギャラリーにおいて開催した。今回は三誓偈（重誓偈）を分刻し短冊にした物、十牛図の小額作品や各自の自由作品等二二〇余点を展示した。来館者の方から質問を受けたり我々も刺激・励みとなる事が多々あった。（宇於崎碧峯）

市川両僊先生を偲んで

添削指導する市川顧問

市川両僊先生の御霊に謹んで感謝の意を捧げます。

市川先生は術後リハビリ治療を受け経過も良く、主治医からもう大丈夫退院ですよーと告げられ、先生の顔は一瞬ホコロビて家族と共に退院し自宅療養になりました。その後、数日して散歩、篆刻指導も始まり、杏壇篆会会員一同安心していたところ、突然意識不明、面会謝絶状態、面会もかなわず一夜にて亡くなりました。とても信じることができませんでした、残念でなりません。

先生は杏壇篆会の名付け親、主宰者です、来年度は創立三五周年展、さぞかし無念と思う、こうして三五年の歩みは大きな業績です、例を上げますが、杏壇篆会記念展（五年毎）開催、日本篆刻展毎年応募、地域の文化祭書道展及び書道連盟展毎年、読売書法展毎年（希望者）、他細かい事多々ありますが、これらの指導振りは並みではなかった。先ず自己に厳しく他人に寛大、篆刻とは誤字は許されない、これくらいなら良いだろう、こんな時には

第三十七回六轡会展

平成三十年八月二十二日（水）～八月二十六日（日）、京都文化博物館において六轡会篆刻展が開催された。今回も、井谷五雲理事長、真鍋井蛙副理事長、小朴圃代表理事の三人の先生方の個性溢れる作品が展示された。正面の壁面には、井谷先生が、銷夏詩句を書・篆刻作品として縦額一〇点発表された。一〇点それぞれの多様な表現に圧倒された。また、前に置かれた巻子には戌年にちなんで、蘇軾の後赤壁賦が生き生きとした線質で書かれていた。真鍋先生は、右壁面に小さ目の扇面作品を額六点、軸四点、机上に折帖作品を発表された。殷・周代の文字、漢代の瓦当・塼の文字と篆刻をマッチさせた作品で、小さい金文、小楷、篆刻とが、うまく溶け合い、心地よく響きあっていた。小先生は、左壁面に、惲南田の画題抜を取り上げ、篆刻・書作品にして、額一〇点を発表された。変幻自在の篆書・章法・刻法、雅号印にも深い意味を込めておられるお話をうかがい脱帽した。先生方それぞれが展覧会作品では見られない新しいものに挑戦されている姿、活気に満ちた作品群に元気をいただき、感動しきりであった。（出田塘葭）

第三十三回 畦石舎作品展

九月一・二日、京都岡崎・日図デザイン博物館において畦石舎作品展を開催しました。初日が雨だったにも関わらず大変多くの方々に足を運んで頂きました。紙面をお借りして一言御礼申し上げます。今回は山西省・晋陽印社社員社友作品、及び山西省・木木学堂（書塾）学生作品を特別展観しました。また今年三月に山東省・東山書院で開催された『日中篆刻家東山書院陶瓷印創作交流活動』参加報告を含めた訪中写真等も合わせて展示しました。会員作品では『陶瓷印創作交流』にも参加した竹内立女の陶印を筆頭に力作が並びました。小生は「もっと真面目にきちんと取り組まねばダメじゃ。」と小先生からお叱りを頂戴し、小気味好く心が折れた次第です。（北田成磊）

第十一回 篆靄社游藝展

九月七日（金）～九日（日）まで兵庫県立美術館王子分館原田の森ギャラリーにおいて第十一回篆靄社游藝展（古溝幽畦主宰）が開催された。会員は書の大作一点と篆刻については半切作品一点と机上作品三点を出展し、書と篆刻の日頃の学習の成果として発表した。キャリアの差はあるが、それぞれ精一杯取り組んだ作品展になった。

また、第十一回展を契機に公募展（学生・一般）を併催したが、百四十三点の応募があり、充実した展示ができた。会期中、大雨警報なども発令されていたが、家族連れなどで会場を賑わいあるものにしてくれた。子どもたちの中には篆刻作品の前で親子共々興味深そうに見ていた姿があり、将来の篆刻家が育ってくれるのではないかと感じた。（石川無外）

字書二、三冊を引用すること。このような厳しさの反面、人に対して優しさと面倒を見てくれる良さがあった、生徒に面倒や負担を掛けない、やらせない、やってもらわない、自分でこなしてしまう。日本篆刻家協会中央研究会、観覧、他展覧会出向等への乗降順路表などは、発～着迄、誠に正確な時間割を毎回配布して引率してくれる、電車乗り換え時間などは、それはそれはアーとゆう間に乗り遅れてしまうほど正確な乗降案内を度々いただき感謝に堪えませんでした。私は三十三歳時から先生の篆刻指導を今日迄受けてまいりましたが、その間篆刻のあれこれは勿論指導受けましたが、こんな事にも。朝顔の水やりはぬるま湯が良い、足利の繊維問屋は北向き店舗、他何でもゴザレ。質問には答えてくれ、楽しく、愉快な先生だった。私は、市川先生に師事し長い間お世話になりましたが、篆刻に対して努力不足にて覇気がなく、いつまでたっても上達しない出来の悪い者で先生の期待にそえなかったこと、この様なことを御見透視ながらも多大な御厚情をくださいましてまことにありがとうございました。

こうして、多くの業績、親切で幅広い人間模様が、私たちの記憶に残り、いつまでもいつまでも思い継がれる事を、誰もが信じております。

（阿部祥廬）

展覧会案内

▼長修会（田中修文）
第一二回 長修会展
会期　一〇月五日～七日
会場　半田市福祉文化会館

▼齊平篆会（真鍋井蛙）
第二一回 齊平展
会期　一〇月六日～八日
会場　大阪産業創造館三階マーケットプラザ

▼川平印会（長谷川拓石）
川平印会展
会期　一〇月六日～八日
会場　ギャラリー書泉

▼菖文篆会 草津教室（師子堂房翠）
第一一回 篆刻書画作品展
会期　一〇月一二日～一四日
会場　草津市立まちづくりセンター

▼不華篆会（酒居石荘）
デザインとして見る篆刻の展開
不華篆会習作展ＸＸⅥ
―「星」字をデザインして生活の中に書・篆刻―
会期　一一月三日～四日
会場　伊丹市立工芸センター
一一月二〇日～二一月二日に兵庫県立丹波の森公苑で巡回展

▼遠邇篆会（伊藤雅夫）
第二七回 篆刻と書 遠邇篆会展
会期　一一月一三日～一八日
会場　磐田市立中央図書館

▼関中印社（平田蘭石）
関中篆刻・篆書展
会期　一一月一五日～一八日
会場　関市文化会館

報告

▼媛禪文会（井谷五雲）
第八回 聴濤印会展
会期　七月一〇日～一五日
会場　名古屋市民ギャラリー栄

▼島根篆刻会（足立瑠泉）
第三九回 島根篆刻展
会期　七月二〇日～二二日
会場　中国電力ふれあいホール

▼齊平篆会（真鍋井蛙）
第一回 齊平高松展
会期　八月一七日～一九日
会場　高松市美術館一階市民ギャラリー

▼菖文篆会（尾崎蒼石）
第二回 蒼嶺会篆刻・書作品展
会期　八月一七日～一九日
会場　丸京庵市民ギャラリー

▼一隅會（池田泥異・喜多芳邑・黒田玉洲・古溝幽畦）
第二五回 一隅會展
会期　九月二八日～三〇日
会場　アートホール神戸

協会行事

理事会・総会・新年会
二〇一八年一月七日(日)
シェラトン都ホテル大阪

東西印人交流会
二月一二日(月)
名古屋東急ホテル

第三四回 日本篆刻展 審査会
二月二四日(土)～二五日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

第三四回 日本篆刻展(第二回日本篆刻家協会学生展)
四月一八日(水)～二二日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

第三四回 日本篆刻展 授賞式
四月二二日(土)
ＡＮＡクラウンプラザホテル神戸

第一〇回 日本篆刻家協会役員展
四月二八日(土)～六月二二日(木)
古河篆刻美術館

第一回 中央研究会
八月四日(土)～六日(月)
舞子ビラ

予定

常務理事会
一月一〇日(土)
錦城閣

第三五回日本篆刻展 審査会
二〇一九年三月二三日(土)～二四日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

第三五回日本篆刻展
五月二二日(水)～二六日(日)
兵庫県立美術館 王子分館(原田の森ギャラリー)

授賞式
五月二五日(土)
ＡＮＡクラウンプラザホテル神戸

訃報

本協会顧問の市川両僊先生が四月一日ご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

本協会元名誉理事の大柳東里先生が五月二〇日にご逝去されました。謹んでご冥福をお祈りいたします。

編集後記

猛暑の夏が終わり、めっきり涼しくなった今日この頃、会員の皆様いかがお過ごしでしょうか？

今夏は自然災害が、大変多かったように思います。広島、岡山の水害、台風二十一号、北海道地震。記憶に新しいのは台風二十一号。二十五年ぶりと言われた非常に強い勢力で、特に近畿地方を中心に大きな被害を出しました。その日午後二時頃、窓から不安げに外を覗いていると、ドラックストアの鉄柱は揺れ、発泡スチロールの蓋は飛び、我が家の屋根瓦も割れ落ち、強風の脅威に驚かされました。関空の被害も甚大で、ちょうど訪中から帰国された協会の先生方が大変な思いをされたようでした。被災された会員の方には、心からお見舞い申し上げます。自然の力には、到底私達は太刀打ちできません。どうしたらいいのでしょうか。

そんな中、明るいニュースも飛び込んできました。大坂なおみ選手、全米オープン優勝！アメリカ人の父と日本人の母をもつ彼女の強靭な体から放たれる鋭いスマッシュは気持ちがいいですね。また、記者会見の質疑応答では、彼女の素朴で気負わない回答が清々しかったです。

季節の変わり目で体調を崩しやすいことと思いますが、ご自愛下さいますよう、また来年新年会でお会いしたいと思います。

（畑間 青露）

編集：会報部
酒居石荘　木村容庸
戸出九廬　畑間青露

お気づきのこと、ご意見など事務所までお寄せください。
FAX 072-760-3853
MAIL info@n-tenkoku.jp